

●春日部市民文化講座（第 9 回）「千利休のわび茶 ～その 4 ー利休の弟子たちー」

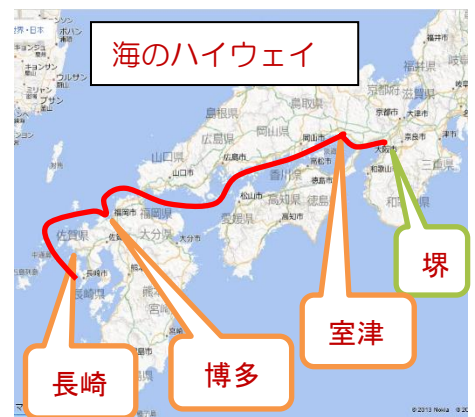
◆日時：2014 年 1 月 29 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■「無能、後惣和尚」と書かれた古田織部

今日は古田織部(1544-1615 年)を取り上げたいと思います。古田織部については、表千家 4 代宗匠の江岑宗左が書いて息子に与えた『江岑夏書(こうしんげがき)』には、利休の弟子七人衆の最後に織部のことを「無能」(能無し)と書いているのです。「茶之湯、無能にて御座候。利休さんの弟子のうち一番茶の湯の才能がなかったのが古田織部だよ」と江岑宗左が覚え書きにしているのです。宗左を辿りますと、宗旦、少庵、利休となりますから、利休の頃から「古田織部はできの悪い弟子だよ」と言われていたのです。ところが、この続きがあるのです。「後に惣和尚(天下一宗匠)」と書いているのですが、何で天下一になったかという、みんな死んでしまったからです。今日は、この辺のところ、古田織部がなぜ「無能」と江岑宗左に記録されていたのかを話したいと思います。ぼくは、このことをずっと考えていたのです。それを私なりにお話したいと思います。

■室津から新しい発見が始まる予感

さて、利休の弟子では、細川三斎(忠興)、高山右近、古田織部など七人衆、高弟がいます。その中で、当時の長崎から都に上る最も早いコースというのは海路で、ハイウェイであった船の航路としては、長崎、博多、室津、堺がありました。博多から瀬戸内海に入って、室津(現・兵庫県たつの市)に着くのですが、去年、初めてこの地を訊ねて行きましたが、陸上交通で行くととても不便なところで現在は寂れていましたが、昔はとても栄えていた港町です。ぼくの勘では、この室津が歴史をほじくり返す時の発見場所になると思うのです。海上交通で富をなした堺の豪商・納屋衆の中で、日比屋了慶や小西隆佐がいました。この小西隆佐というのは行長のお父さんです。この小西一族というのは、秀吉の子飼いと云ったら何ですけども、秀吉が下働きの頃から小西家は付き合っていたのです。隆佐は堺の豪商でもあり、秀吉によって河内国と和泉国の代官になります。そして、その子どもの小西行長は朝鮮半島侵略の立役者の一人で、加藤清正と競うのです。そして、この室津と小豆島は小西家の支配地でした。ですから、高山右近が秀吉によって追放された時に、右近は明石の城を返す訳ですが、かくまわれたのが小西行長の領地でした。この室津は「バテレン追放令」が出た時に、宣教師やキリシタン大名達が集まり会議をしたこともある重要な場所なのです。



■歴史のキーマン・日比屋了慶

日比屋了慶という人は、あまり知られていないのですが、茶の湯に関しても、キリシタン史に関してもキーマンです。日本人キリスト者の家系の中で、燦然と輝く人たちを輩出しているのです。そして、殉教者がここに集まる大金持ちなのです。小西隆佐も千利休もその仲間です。日比屋了慶、千利休、小西行長の家は近く、この辺り是一个の塊のような感じでした。細川家(忠興の父・藤孝)と高山家(右近の父・友照)は織田信長の武将でして、秀吉の子飼いではないのです。ところが、小西家(行長の父・隆佐)は秀吉が拾い上げた武将で、子飼いのの中の子飼いでした。実は小西行長もすごいキリシタンなのですが、高山右近のように秀吉から「お前、禁教しろ」とか「キリシタンはだめだ」とかは言われていないのです。つまり、行長は完全に秀吉の懐の中に飛び込んでいるのですよ。これは不思議なことです。

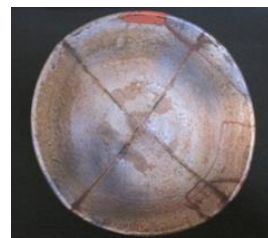
■織田信長と宣教師たち

信長については、皆さんいろいろなイメージを持っていると思いますが、茶の湯にご衷心であり、宣教師に対してはべったりだったのです。皆さんご存じのように、信長が安土城を造った時に、天守閣を「天主閣」(ポルトガル語のデウス)と書いたのです。天の唯一の神という意味で安土城のトップに据えたのです。ですから、凄く先進的なものに彼は敏感でした。ザビエルの伝えたキリスト教や宣教師、特に高山右近の信仰には、信長はたいへん感動していました。

■「へうげもの」の古田織部

神屋宗湛が、その日記の中で古田織部のことについてこう言ったのです。1599(慶長 4)年 2 月 28 日の茶会です。この日は『利休忌の茶会』だったと思うのですが、その時に持った道具について「薄茶の時は瀬戸茶碗、しつみ(沈む)候なり、へうげものなり」しつみというのは、歪んでいるということで、ひょうげものなり・と。古田織部は、こういう「へうげた」茶碗を作っちゃったのですよ。それまでに、こんなものをたくさん作っています。大阪の南蛮文化館に価値のある作品が多くありますが、堺市博物館が借り受けて展示してくれたことがあります。大阪南蛮文化館にはこうしたものはありませんが、行けば見ることができます。ただし、向こうの定められた日にしか見られません。これが「へうげもの」なのです。軽やかです。これは長次郎の土器の茶碗に似ていると言えば似ています。今日はさらに凄いの

を持ってきました。これは、武将が手柄を挙げて「お前に一国をあげよう」と、例えば、信長から秀吉が長浜城をあげようと言われた時に、一国の領地よりもこちらの茶碗が欲しかった。なのに、織部はもらった茶碗を見事に十文字に割りました。これは今でも存在している織部好みの十文字に割れた茶碗です。これは小ぶりの井戸茶碗です。



■茶人たちの文化度を読み取る

古田織部のことについては謎ばかりです。彼の切腹の理由もいろいろ言われていますけれども、謎が多いです。古田織部のわび茶、高山右近のわび茶、元々は千利休のわび茶なのです。小堀遠州からのわび茶は「綺麗わび」と言って、そこで一つ江戸時代に入ってからぐんと線が引かれます。これは利休さんが目利きした「名物

肩衝茶入記」です。いわば当時の名物茶入のリストで、誰が所持しているのかが記されています。その中に、その8行目にある「高山」というのが、高山右近のことです。そして利休さんがわざわざ見取りの絵図まで描いています。銘は「時雨肩衝ト云(しぐれかたつきという)」そして、この茶入の胴が五つに割れている。「如此(かくのごとき)」「大瑕疵(割れて疵が生じているもの)」。けれども「猶名物也」天下に喧伝されている名物茶入であったようだ注記の筆を加えているのです。ぼくが目利したのは、高山右近が割れた肩衝茶入を所持していて、それを千利休がわざわざ絵に描いて、自分の心をここに五つに割れていてもいい物だと言っていることです。もう一つは、秀次が官兵衛を通して、藤原定家の色紙の鑑定を利休に頼んだところ、利休さんが官兵衛に「これは良いものだ」と秀次に伝えてください」という内容を記した書状です。つまり、当時の茶人たちは、文化を舐めるだけではなく、鑑定できるところまで深めていた。それだけ心の肥やしを欲し、飢え渴いていたのだということがこういう文章から読み取れると思います。

■利休さんのわびの心は憐れみ

ぼくが好きな茶碗をお見せします。今井理桂さんの茶碗です。ぼくはいつも割れたものとか、壊れたものしか入らないものだから、ある時、彼が山から下りてきて「高橋さん、これ使って」と言ってくれたのが、その割れた茶碗なのです。金継ぎだけ、ぼくが手をかけましたが、そのままの茶碗です。これは今井理桂さんが割って捨てたかったのだけれども、捨てられなかった茶碗です。普通、陶芸家というのは、失敗作はすべて割ってしまうのですが、これだけはどうしても壊すに壊せなかったのです。そこで、最後は牧師をさせてください。聖書にこういう言葉があるのです。『人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださいましたのです。』【ローマ人への手紙 9章 20-24節】。ぼくが、これから何を言いたかったかという、あのぼろぼろの汚い器、窯の中で割ってしまった器、役に立たないと思うような器でも、これはまさにぼくの姿です。割れてきた者、捨てられて当然のような者のぼくが、今こうやって皆さんの前でお話させていただいているのです。憐れみですよ。神様の憐れみ以外の何ものでもないですよ。利休さんのわびの心を形に表した茶碗、利休さんが長次郎に焼かせた茶碗というのは土器ですよ。利休さんのわび茶って憐れみだけだと思うですよ。捨てられて当然のものをぽっと手にして「これが綺麗じゃない」というわびの心に信長は共鳴し、秀吉も共鳴し、家康もお茶をやりましたからね。そして、それが見事にキリスト教の愛、憐れみとこう協奏曲のように響きあったのです。これがぼくの作品です。この下の花台は、安土城の本丸にある大きな杉の木が倒れました。それを摠見寺(そうけんじ)でお札に作ったそうです。そこで、ぼくが「まだ、その場所分かる」って聞いたら、「まだ切り株なんかがありますよ」というので、そこへ行って拾ってきたのが、この切り株なのです。そして、この花入は泪壺です。戦地に出て行ったご主人たちを忍んで泣いた涙をここに入れたという壺です。そういう壺に、ぼくは一輪の花を生けたのです。これがぼくの心です。



古田織部は、織部模様などで非常に馴染みがありますが、謎の人物だったのです。『へうげもの』かあ。。